

2019 年に開始された CAIR (Campus Artist in Residence) は、海外の美術系大学の学生と筑波大学で芸術を学ぶ学生とが、共に滞在制作と展示を行うプログラムです。

2度目の開催となる今回は、テーマ「Interaction(意味:対話、交流、相互作用)」にちなみ、人と人との対話や交流、そしてそれらを通した相互作用がもたらされるような CAIR を企画しました。

Interaction をテーマとした作品制作、交流と協働を促すアーティスト同士のペアシステム、来場してくださる鑑賞者の皆さんも巻き込んで意見共有するコメントボードなどを通して、多様な人々が互いに影響し合い、またそれぞれの世界が広がってゆくような場となることを目指しました。

Campus Artist in Residence (CAIR) is a program that was introduced in 2019 for student artists from across the globe and the University of Tsukuba to make art and exhibit it together.

The theme for the second CAIR to be held this year is, 'Interaction' and it is aimed at creating dialogues, interaction, and communication between people.

The intent is to create a space where different people have an impact on each other and learn something new through different devices. To achieve this, creating art based on 'Interaction' as the theme, a buddy system that promotes communication and collaboration between the artists, and the comment board for exchanging thoughts with audiences, have been used as platforms.



ペアシステム Buddy-system

本企画では、作家同士で作品を高め合うために ペアシステムを導入しています。海外の学生と 筑波大の学生のペアにキュレーター(ディレク ター)が加わり、共同のアトリエにおいて制作の 過程を親密に共有しました。キュレーターは制 作過程や交流の記録を行い、その記録も含めた 展示空間を計画しました。食事をともにする、 東京観光を楽しむなど、彼らはアトリエの外で も多くの時間を共有しています。

The buddy system is a way to enhance communication and working among the artists. The curator (Director) joined a buddy of a student from across the globe and a student from the University of Tsukuba, and they shared their artwork process in the same studio space. The curator recorded and planned the exhibition and this included documentation of the process. They shared a lot of time even outside the studio, such as having dinner together and enjoying sightseeing in Tokyo.



Takumi Harasaki Piotr Zięba

Nanami Abe



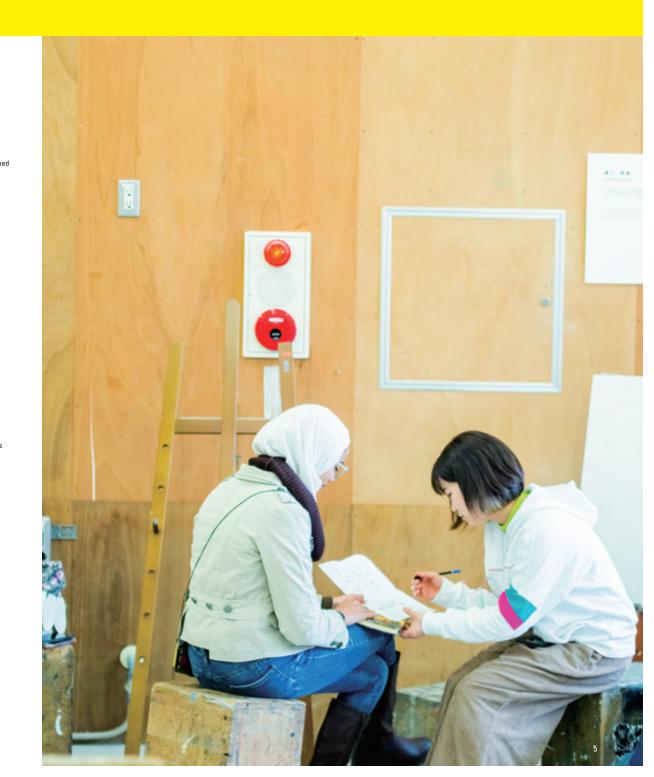
Shen Lintao Chiaki Numano Linda Gisselle Cruz Gonzáles

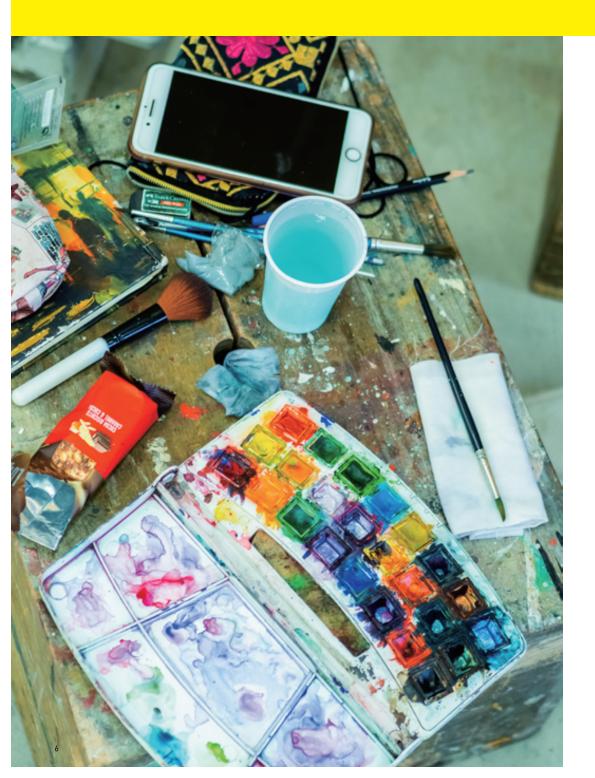
Haruka Ohmori



Ryotaro Sato Kerry McGranaghan

Hina Matsuura





2-5	Campus Artist in Residence 2020 -	Campus Artist in Residence 2020 -
8-9	CAIR 2020 プログラム -	CAIR 2020 Program -
10-45	アーティスト	Artsits
	申 林涛 沼野 千秋 リンダ・ジゼル・クルス・ゴンザレス	Shen Lintao Chiaki Numano Linda Gisselle Cruz González
	満口 笑美 ヤラ・マグディ・アブデラズィエム・アフマド	Emi Mizoguchi Yara Magdy Abdelaziem Ahmed
	佐藤 瞭太郎 ケリー・マグラナガン	Ryotaro Sato Kerry McGranaghan
	原﨑 匠 ピョートル・ジエバ	Takumi Harasaki Piotr Zięba
46-47	インタラクティブ・ミーティング -	Interactive Meeting -
48-51	CAIR 2020 コラム アンディ・アッシュ 山口 輝昭 -	CAIR 2020 Column Andy Ash Teruaki Yamaguchi -
52-57	フォトギャラリー	Photo Gallery

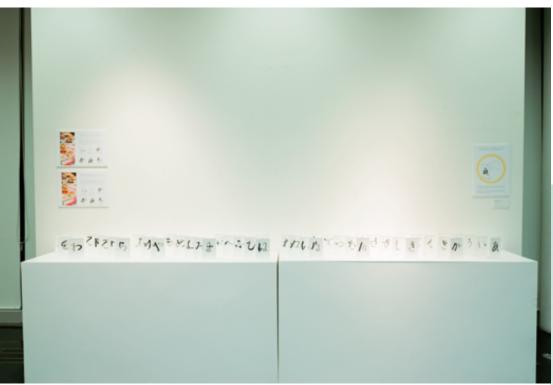
	オープンスタジオ / アート & デザイン実習室 1 2020 年 2 月 12 日 - 2020 年 2 月 18 日
	批評会
	レセプション / 筑波大学総合交流会館 2020 年 2 月 19 日
	展示 / 筑波大学総合交流会館 2020 年 2 月 20 日
	インタラクティブ・ミーティング
	ワークショップ「Basic concepts about Art Intervention」by 山口輝昭 ギャラリートーク「個展:The Art of Walking」/ アートギャラリー T+by アンディ・アッシュ 最終プレゼンテーション by 9 名のアーティスト
	Open Studio / Practice Room of Art & Design 1 February 12 - February 18, 2020 'Crits' Reception / University of Tsukuba 30th Anniversary Hall
	Exhibition / University of Tsukuba 30th Anniversary Hall February 20, 2020
TUTE to	Interactive Meeting
22020	Workshop 'Basic concepts about Art Intervention' by Teruaki Yamaguchi Gallery talk 'Solo Exhibition : The Art of Walking' / Art Gallery T+ by Andy Ash Final presentation by 9 artists

'ー ティスト	Artists
四野 千秋	Chiaki Numano
構口 笑美	Emi Mizoguchi
左藤 瞭太郎	Ryotaro Sato
申 林涛	Shen Lintao
京崎 匠	Takumi Harasaki
テリー・マグラナガン	Kerry McGranaghan
リンダ・ジゼル・クルス・ゴンザレス	Linda Gisselle Cruz González
ピョートル・ジエバ	Piotr Zięba
ヤラ・マグディ・アブデラズィエム・アフマド	Yara Magdy Abdelaziem Ahmed
デスト教員	Guestteachers
	Andu Anh
アンディ・アッシュ	Andy Ash
山口 輝昭	Teruaki Yamaguchi



Hiraganataipu-type

Postcard, Stand, Paper, foam core board



Q.制作した作品についてコメントをお願いします。

A.前述した通り、自分のやりたいこと・こだわりをもって作成できたことが何よりの達成感です。制作過程でカタカナ・濁音 ver. も作成したいと思いついたり、実際に展示をしてから展示台に段差が欲しいと気付いたり。Andy の「wanted があればあるほど成長できる」という言葉を痛感した作品になりました。

 $\ensuremath{\mathbf{Q}}$. Would you like to share any comments on the work that you produced during the residency?

A . I wanted to create art from my heart, and I am satisfied with my work. I came up with an idea to create Katakana and dull-sound versions in the middle of the working process and I noticed that there should be different levels of placement on the display stand after finishing the set up. I keenly realised the words from Andy. You will be able to grow up as much as you thought "I wanted".



intangible

Acrylic in acetate



Q. 制作した作品についてコメントをお願いします。

A.このプログラムは、自分が何をしたいか、それを伝えるために何をする必要があるのか、そして自分をどう成長させるかについて、いつもとは異なるレベルで集中し深く考えさせてくれました。そして、自分自身や自分の意志をどのように作品に反映させるかということも、このレジデンスから得た最も重要な考えの一つであると思います。

 ${\bf Q}$. Would you like to share any comments on the work that you produced during the residency?

A . The programme helped me to think deeply, focus on another level about what I want to do, what I need to do to communicate it, and how I develop myself in regard to it. How I project myself in my work and how I project my intentions in my art production are some of the most important thoughts from the residency.



Whereverlgo

Canvas and oil painting



Q.制作した作品についてコメントをお願いします。

A.アイデアを練る時はいつもその時の自分の気持ちに近い音楽を聴きながら、感情を整理して絵にしています。

制作した Wherever I go は、またいつかみんなに会いたい、会おうねという気持ちを込めて描きました。

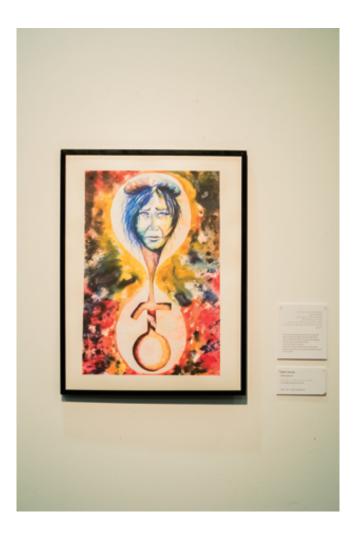
(今回ずっと聴いていたのはヴァネッサ・カールトンの A Thousand Miles だったので、カラオケで流れてきて本当に驚きました!) Q . Would you like to share any comments on the work that you produced during the residency?

A . When I think about ideas for my work, I listen to music that is similar to my feelings, to figure out what I want to do. I drew 'Wherever I go' with all my feelings that 'I hope to see you soon, I believe'. (I was so surprised when we went to karaoke, because the song 'A Thousand Miles' by Vanessa Carlton that I was listening during studio work was suddenly playing there!)



Female but...

Water colours, acrylic and pigments



Q. ペア、グループを組んだアーティストとキュレーターにメッセー ジをお願いします。

A. あなたたち2人からはたくさんの経験をもらいました。ずっと2 人のことを忘れないし、本当に愛しています。そしてみんなとも、 また会って一緒に制作活動がしたいと心の底から願っています。 Sorako、私のために全てを整えてくれてありがとう。あなたはいつ もたくさんのことで私を助けてくれた。あなたは絶対に成功する人 になると信じてる!

私の妹、Emi にも感謝しています。私たちの関わりの中にあった何

Q. What would you like to tell your buddies (artist and curator)? A . I gained a lot of experience from you guys, I will always remember and love you! From the bottom of my heart, I really hope to see and work with all of you again. Thank you Sorako for everything you made for me; you were always helping me with a lot of things, and I believe that you will be a very successful person! Thanks Emi 'my sister' for the details in our relationship and for every time you laugh with me. I love you more than you can imagine. Thank you my sister for every single thing!



Q.制作した作品についてコメントをお願いします。

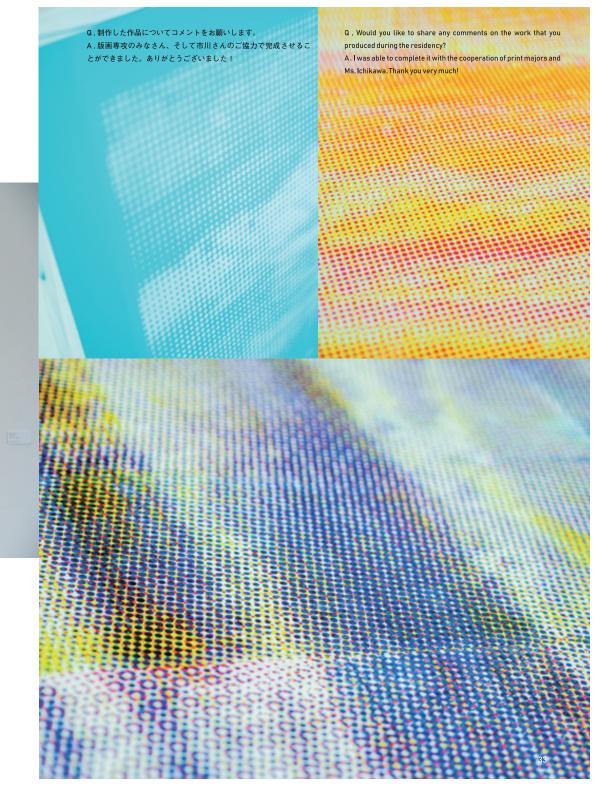
A. 私は自分の作品の色がとても気に入っていますし、その顔に感 情がよく表れた人物を描くことができました。私はとても酷い慣習 である FGM(女性器切除)について表現しました。私はその慣習を すぐにやめるべきだと願っています! 砂時計を描いたのは、それが 彼女の人生を終わらせてしまうと伝えたかったからです!女性らし さも失わせてしまいます!また、私は若い少女も描きました。この 問題は、生まれて数日から18歳になるまでの少女に起こるからです。 Q . What Would you like to share any comments on the work that you produced during the residency?

A . I like the colours in my work so much, and I could draw a person whose feelings are visible. I talked about FGM, which is a very harmful custom; I wish I could make it stop very soon! I drew a sand clock because I wanted to tell others what ended her life! Her femininity! I also drew a young girl because it always happens to girls between the days from birth and until maybe 18 years old.

Distant waves

Canvas and silk screen printing





London Syndrome

Digital drawing, acrylic painting and silk screen printing





- Q.制作した作品についてコメントをお願いします。
- A. 今回の作品は波をイメージしていて、鑑賞者の視線が小さな作品と大きい作品の間を行き来することで、画面の外へと広がっていく流れを作りました。古き良きものは残し、新しいものも共存させていくという日本の特徴やその不安定さを感じてもらいたいです。
- $\ensuremath{\mathtt{Q}}$. Would you like to share any comments on the work that you produced during the residency?
- A . The work which I produced in the residency was inspired by waves. I tried to make the viewer's gaze move between small pieces and a large piece, creating a flow that spread out of pictures. I want people to feel Japan's characteristics and its instability of keeping good old things in coexistence with new ones.





Writings

Mixed Media on paper







共有し合うアーティストたち

アンディ・アッシュ ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン

アーティスト・イン・レジデンス・プログラムとは

アーティスト・イン・レジデンス (またはアーティスト・レジデンシー) は、アーティスト、大学教員、研究者、キュレーターやその他限速するクリエイティブな人々を、普段の環境や責務から距離をおいた場所に一定期間招く機会のことを指す。期間中には、内省したり、研究したり、議論を交わしたり、プセンテーションを行ったりする時間がもたらされる。このような時間は、いつもと違うコミュニティの中で、各自の実践を深く追究する機会をそれぞれに与えてくれる。また、新たな人々と出会ったり、未体験の技法を試したり、未知なる土地での生活を経験したりするチャンスも得られるだろう。アーティスト・イン・レジデンスとは、世界各地から集まるアーティストたちが新たな空気と環境に身を置いて時を過ごすことを可能にする、重要なものである(Lehman、2017: Corbett、2015)。それは文化と芸術における交流を支え、新たな試みやアイディアを育み、そして研究を次なる段階へと発展させる土台となりうる。

アーティスト・レジデンシーには長い歴史があるが、いくつかの事例は、クリエイティブな人々がその地にとどまるように勧めたコミュニティとして始まったことを示している。よく引き合いに出されるのは、1880 年代に芸術家コニーとして成立した、ドイツのヴォルブスヴェーデ(Worpswede)にあるアーティスト・コミュニティの例である(Lehman、2017: Corbett、2015)。その他、1900年にニューヨーク州に設立されたヤドー(Yaddo)の例なども挙げられる。このような初期の形態を経て、アーティスト・レジデンシーは芸術、教育、そして文化的環境において確固たるものとなり、プロアーティストのキャリア形成において決定的に重要な役目を果たすようになった。アーティスト・レジデンシーは、美術館・博物館、大学、キャラリー、公共空間、政治機関、劇場、アトリエ、アーティスト・ラン・スペース、祭り、そして商業や産業といった文脈においても実践されている。このような機会は今や世界中に数多く存在し、都市でも地方でも、時には人里離れた辺境においても見ることができる。もはや一つのモデルなどはないし、そこにかけられる 期待や要求も千差万別であるといってよいだろう。

CAIR 2020 の目的は何か

アーティストがアーティスト・イン・レジデンスに参加したがる理由を考えるのは簡単である。資金、アトリエの設備、材料、旅費や滞在費などが提供されるからだ。では今回、筑波大学にとっては一体どんなメリットがあったのだろう?今年度の CAIRにおける重点は、自分たちの学びのために何を目的さずべきかという、学生たち自身の反省と議論から導き出されている。企画・運営を担ったワーキングチームは、CAIR 2020のテーマを「Interaction」と設定し、参加者が交流しながら活発に協働する機会となることを目指した。それは、前回関わった学生たちが以前の CAIR には欠けていたと感じていた部分でもあった。外部からの助言者としての私の役割というのは基本的には単純ア、参加者を力づけ、対話と生布の時間が生み出されるようなプログラム

を提案することだった。ねらいは明らかで、協働的な場において学生参加者 (アーティスト、キュレーター、鑑賞者) が文化的に豊かな環境の一員となるような、作品制作をベースとした実践共同体 (Wenger, 1998) を作り上げることだった。アトリエでのこのような実践はおそらく、参加者に新しい国際的な考えや見方をもたらし、グループ内での気づきや認識、そして理解を促したのではないだろうか。加えて、アーティスト、キュレーター、そして教員たちが互いに交わり関わり合うような場となることも期待された。

どのように達成されたのか

プログラム進行の核として導入されたのは、「ベア・システム Buddy System」である。海外アーティストと筑波大の学内アーティストとがベアを組み、彼らのサポートを1人のキュレーターが担当した。 4つのグループが作られ、彼らはレジデンスの開始前から期間中、そして終了後にも、頻繁に対話を交わしつつ活動を共にしてきた。また、プログラムには、批評会(Crit)、日々の反省会ビデオ、東京国立博物館へのショートトリップ、レセブションでのプレゼンテーション、そして最後のまとめとしてグループごとの振り返りプレゼンテーションなども組み込んだ。

このカタログは、CAIR 2020 の成果と、CAIR 2020 が目指した国際的な学生アー ティストの [Interaction] を示す何よりの証である。絶え間ない対話と共有 によって生み出された豊かで多様な学びを、本書から見てとることができる だろう。

参考文献

Corbett, R. (2015). A German Artist Colony, Suspended in Time, Stakes a Place in the Contempo rary Scene, New York Times Style Magazine. Retrieved 12 March 2020 from https://www.nytimes.com/2015/08/20/1-magazine/worpswede-artist-colony-germany.html

Lehman, K. (2017). Conceptualising the value of artist residencies: a research agenda.

Management: Science and Education, Vol. 1, No. 1, pp.9-18.

Wenger, E. (1998). Communities of Practice: Learning, Meaning, and Identity. Cambridge University Press

Sharing Artists

Andy Ash

University College London

What is an artist-in-residence programme?

An artist-in-residence programme is an opportunity to invite artists, academics, researchers, curators and other related creative individuals for a time and space away from their usual environments and work obligations. This moment provides a time for reflection, research, making discussion, and presentation. It should allow an individual opportunity to explore his/her practice within another community, a chance to meet new people, perhaps use new materials/techniques and to experience life in a new location. Artist-in-residencies are important because they provide opportunities for artists from around (Lehman, 2017; Corbett, 2015) the world to spend time in a new atmosphere and environment. They support cultural and artistic exchange, nurture experimentation and new ideas, and support research and the development of new work.

Artist residencies have a long history, some suggesting they started firstly as communities to encourage creative people to settle. Often quoted as an example is the artist community in the German town of Worpswede (Lehman, 2017; Corbett, 2015) which was established as an artist colony in the 1880's. Other examples exist for instance the Corporation of Yaddo founded in 1900 in the state of New York, From these early days' artist residencies have become an accepted part of the art, education and cultural landscape, and crucially an important part of any professional artists career development. They can exist in museums, universities, galleries, community spaces, government offices, theatres, studio spaces, artist run spaces, festivals, and also in business and industry contexts. These opportunities now exist in hundreds of locations across the world, in urban and rural communities and sometimes in very remote locations. I think it would be fair to say that no one model exists and the expectations and requirements are quite bespoke and vary greatly.

What was CAIR 2020's purpose?

It's easy to see why an artist would want to take part in a residency, it offers funding, studio facilities, materials, travel and accommodation but what is in it for University of Tsukuba? The focus on this years' CAIR came from the student's reflections and discussions on

what they felt the purpose should be for their learning. The CAIR 2020 working team identified the theme as being 'Interaction'; a chance to communicate and actively work alongside each other, as this was something that was generally felt lacking in previous experiences for the Tsukuba students. My role as an external advisor was easy in many ways. I devised a programme that empowered the participants and generated moments for dialogue and sharing. The focus seemed obvious, to generate a community of practice (Wenger, 1998), based around art making, where the student participants (artist, curators and spectators) would be a part of a culturally enriching environment in a collaborative space. The studio practice would expose the participants to perhaps new international ideas and perspectives and develop awareness, knowledge and understanding within the groups. It was also hoped that an intersection between, artist, curator and teaching staff could be generated.

How was this achieved?

At the core of the process it was decided that a 'buddy system' be installed; international and local Japanese artist were paired and a curator allocated to the pair to support. Four groups of buddies were established and they worked together in a constant dialogue, before, during and after the residency. The programme was structured around a series of whole group/individual crits; video diary reflections; a visit to the Tokyo National Museum: gallery presentations and finally a group evaluation presentation.

This catalogue is testament to the success of the CAIR 2020 and its ambition to generate an international student artist 'interaction'. You can see from the enclosed content the range and diverse learning that took place through constant dialogue and sharing.

References

Corbett, R. (2015). A German Artist Colony, Suspended in Time, Stakes a Place in the Contempo rary Scene, New York Times Style Magazine. Retrieved 12 March 2020 from https://www.wnytimes.com/2015/08/20/t-magazine/worpswede-artist-colony-germany.html

Lehman, K. (2017). Conceptualising the value of artist residencies: a research agenda.

Management: Science and Education, Vol. 1, No. 1, pp. 9-18.

Wenger, E. (1998), Communities of Practice: Learning, Meaning, and Identity. Cambridge University Press.

CAIR 2020を振り返って

山口 輝昭

バハ・カリフォルニア自治大学

近年、世界は主に社会、環境、経済の三つの側面で切実な問題に 直面し、その早急な解決に迫られています。このような背景から、 社会の中での芸術の役割と貢献方法を見極めるための「ポジショ ニング」が大きな課題となっています。

今回集まった9人の国内外の才気あふれる大学生作家たちによって、文化的プラットフォームとしての役割を果たした今回の国際レジデンス CAIR 2020は、筑波大学主催の下、イギリスの Andy Ash 先生、そして多くのスタッフの方々と来場者の協力により成功を収めました。

参加者達は文化と個人のコンテクストの違いを意識しながらも、 「Interaction」というテーマに沿って作品を制作しながら切磋琢磨 し、限られた時間の中で全力を出し切りました。私は、今回の交 流によって培った経験や人との絆が、彼らの人間として、作家と しての成長の糧となり、同時に筑波大学をはじめ各参加者の所属 大学の更なる発展を促し、次の時代の芸術の礎となると確信して います。そういった歴史的価値の伴う貴重なイベントに、招待教 員として彼らの制作と発表の工程に立ち会い、ワークショップを させていただいたことに深く感謝を申し上げます。

Looking Back on CAIR 2020

Teruaki Yamaguchi

Autonomous University of Baja California

These days, the world finds itself dealing with several serious issues, particularly related to social, environmental and economic matters that need to be solved as soon as possible. On this background, it is important to position the role that the artistic field plays in order to define a means of social contribution, as it represents one of our most important assignments.

The CAIR 2020 event was successful in many respects, thus becoming a cultural platform thanks to the joint efforts of the nine national and international participants, the guidance provided by Mr. Andy Ash from the U.K., the presence of all attendees and the general public, and above all, the excellent event organisation of the University of Tsukuba.

The participants did their best in carrying out their projects, always adhering to the event's overall theme, 'Interaction', and also taking into account cultural differences and personal context within a limited period of time. I have no doubt that this experience has motivated all those involved in this event to grow both professionally and personally. It has also contributed to the development of the universities that the participant artists attend. Above all, I hope that this experience serves as a driving force for further artistic growth. It is possible to say in this sense that the event possesses great historical value. For that matter, I am most grateful for having had the opportunity to help during this process of artistic production and exhibition, and also for conducting the workshop as invited professor of the Autonomous University of Baja California, Mexico.



CAIR 2020 ワーキングチーム CAIR 2020 working team

キュレーター Student Curator

ディレクター Directors Pi部 七海 Nanami Abe 大森 春歌 Haruka Ohmori Ev Haruka Ohmori Waft 宙子 Sorako Kashimura 松浦 妃那 Hina Matsuura

デザイナー Designers 伊藤 栞 Shiori Ito 照屋 明花 Meika Teruya

フォトグラファー Photographers 岡本 太玖斗 Takuto Okamoto 沼中 秀薫 Hideyuki Numanaka

芸術系 Faculty of Art & Design

箕輪 佳奈恵Kanae Minowa市川 絢菜Ayana Ichikawa

野中 勝利 Katsutoshi Nonaka 星 美加 Mika Hoshi 中臺 久和臣 Hisanao Nakadai

CAIR 2020: Interaction CAIR 2020: Interaction

編集:CAIR 2020 ワーキングチーム Editing:CAIR 2020 working team

写真:岡本太玖斗 沼中秀薫 Photo: Takuto Okamoto Hideyuki Numanaka

デザイン:照屋明花 Design:Meika Teruya

印刷:株式会社クロスメディア プリンパ Printed by: Crossmedia Corp. Prinpa 発行:CAIR 2020 ワーキングチーム Publication: CAIR 2020 working team 発行日:2020 年 3 月 31 日 Date of Issue: March 31, 2020

©CAIR ワーキングチーム(筑波大学芸術系) Copyright CAIR 2020 Working Team, Faculty of Art and Design, University of Tsukuba All Rights Reserved. 本書の全部、または一部を無新で複写、複製することを禁ず



